

2014年3月2日  
ウィメンズクラブ

## あしなが育英会仙台レインボーハウスを訪問して

ウィメンズクラブでは、東日本大震災で親を失った子どもたちの心のケアの中心拠点となるレインボーハウス（RH）建設に、当初から協力して参りましたが、この度仙台RHが竣工・オープンし、3月2日にお披露目とお知らせを頂き、小杉・北澤の二人で訪問・見学してきました。仙台駅から地下鉄で1駅目の五橋駅から徒歩2・3分のアクセスの良い3階建て延べ面積2200㎡の建物です。



中央はホール 右手は本館

初めに「あしなが育英会」副会長の藤村修氏（野田政権時の官房長官）が育英会の歴史と、活動の経緯（遺児の進学支援だけでなく、今では「身内の死を自責の念で捉えてしまいがちな子どもたちの心のケアにまで広げた虹の家構想が生まれた」と話されました。

仙台RHの林田所長からは「阪神淡路大震災でがれきの下から救出された子どもの絵（黒い虹）がRHの名前の由来となったこと、「子どもの心に掛っている黒い虹を何とか明るい美しい虹にしてあげたい」との思いから神戸RHが被災4年後に建設されたこと、そして今回の東日本震災では神戸での経験を元に、早い時期から東北各地にRH建設が計画され、先ず仙台RHがオープンし、さらに4月には石巻の、5月には陸前高田のRHが竣工する予定です。



神戸の児の描いた黒い虹



多目的ホール



隠れ穴

いずれも居住用ではなく通所型の施設となっています。

多目的ホール（左の写真）は子どもたちが思いっきり体を動かすことのできる体育館として、またイベント会場として、そして又「お泊り会」の際には、子どもたちの部屋として幾つものテントが張られる等活動の中心となるスペースです。週末や夏休みなどを中心に子どもたちや保護者が集まり、一緒に遊んだり、話し合ったりする「集い」やその他様々な集会在が企画されるます。ホール吹き抜けの2階からは下で遊ぶ子どもたちの姿が眺められるようベンチが置かれ、それに続いて保護者が滞在できる和室も用意されていました。ホールの片隅には皆から離れて内緒話や一人静かに過ごすことが出来る様にと隠れ穴のようなコーナーも設けられています。

壁も床も天井も燃えるような赤色の「火山の部屋」。ここは子どもたちが鬱屈した気持ちを爆発できるよう、どんなに暴れても大丈夫なようにクッション性のあるマットが



貼られ、天井からは大きなサンドバッグが吊るされています。床にはパンチ用のグラブが転がっていました。

大きな円形ソファの背もたれに数多くのぬいぐるみが並ぶ「おしゃべりの部屋」では、皆で輪になっておしゃべりをしたり、輪の真ん中で寝転がってじゃれ合ったり…。



とてもリラックスできる雰囲気です。私たちが気付かぬ内にソファに腰を下ろし、見学者同士でおしゃべりを始めてしまいました。

キッチンが未完成でしたが、子どもたちが料理もできるよう整えていく予定だそうです。廊下の一角にこんな身長計が立っていました。

さすが「あしながさん」です。

子どもたちのお世話をするスタッフは10名。宮城・岩手・山形など東北各県から新規に採用され、最大100名の子どもたちの対応にあたるそうです。スタッフを支え、子どもたちの心に寄り添うファシリテーターやボランティアの協力募集はこれからだとか。



あしなが身長計

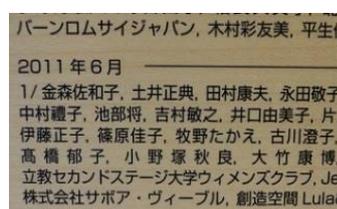
入口近くの壁には、虹の家建設に寄金協力をした個人や団体の名称が刻まれたプレートが年・月毎に記されており、「立教セカンドステージウィメンズクラブ」の文字もありました。



保護者用和室（3部屋）



3階見取り図



寄金協力者プレートの一部

木の香の漂うこの家に一日も早く被災した遺児たちの笑顔と笑い声が溢れ、穏やかで暖かな空間で、心安らいた時間を存分に味わってほしいと思いながら、仙台を後にしました。

(写真：小杉 文責：北澤)